

乙女高原が好き！ 2603 号

今年の夏も暑かったですが、乙女高原は涼しく、特に木陰では爽やかな風が吹き、天然クーラーの中にいるようでした。草原ではキンバイソウ、ヤナギラン、クガイソウ、ヨツバヒヨドリ、コオニユリなど夏の花々が次々と咲き、チョウやマルハナバチなどの昆虫もたくさん見られました。そしてファンクラブの夏のいろいろな活動もほぼ予定通り終えることができました。9月に入るとすっかり涼しく、一面のススキ草原になり、その中にリンドウやヤマラッキョウなど秋の花も見られるようになって、すっかり秋めいてきました。これからは草紅葉や木々の紅葉が楽しめる季節になります。乙女高原で輝く秋を、そして晩秋から初冬の静かさを楽しみましょう。

草刈りボランティアへのご参加を！

今年も乙女高原の草原にはたくさんの花が咲きました。シカ柵ができて10年以上が過ぎ、花の数が爆発的に増えてきた感じです。花々にはチョウやハチなど多くの昆虫たちが訪れて受粉をし、また来年、多くの花を咲かせてくれることでしょう。昆虫や植物の実などを求めて野鳥や野生動物もやってきます。生き物のつながり、豊かな生物多様性が乙女高原では見られます。多くの地域でシカの食害や温暖化などによって、花が少なくなり、それに伴って、花を訪れる昆虫などが姿を消していつている現状の中で、乙女高原は貴重な草原となっています。また生物多様性ばかりでなく、草原が温暖化防止にも役立っていることがわかってきています。

このように大切な乙女高原の草原を維持していくためには、草刈りが必要です。明るい草原にはたくさんの樹木の種も落ちて、幼木がどんどん育っていきます。これを刈らないと、草原は森林になってしまうのです。

去年は全国的なクマ出没騒ぎのため、乙女高原の草刈りボランティアも中止に追い込まれてしまいました。しかし草原を維持するためには草刈りが必要なので、有志による草刈りを3日間行いました。今年は例年のように多くの人にご参加いただいての草刈りを予定しています。11月23日（月/勤労感謝の日）に第25回乙女高原草刈りボランティアを行います。多くの皆様のご参加をお待ちしています。



※参加申し込みQRコードはこちら



1 昨年の草刈りボランティア

詳しくは同封のチラシをご覧ください

スクープ!! 乙女高原“第7の”マルハナバチ!?

植原 彰

「季節外れ・規格外のコーちゃん（コマルハナバチ）がいる」と思ったのは今年だけではありません。「全身真っ黒でお尻だけ橙色」なのでコーちゃんとはばかり思っていました。盛夏から晩夏（コーちゃんは夏の初めに巣を解散する）に見られ、大きくて（女王以外コーちゃんは小さい）、花粉団子を付けています（子育て中!働き蜂?）

「コーちゃん女王の季節外れ子育て行動。原因は温暖化か?」と、勝手につじつまを合わせていました。でも、ハタと気づいて、マルハナバチの師匠である国武陽子さんに確認していただいたところ、そっくりなデザインですが細部が異なり、サイズが大きく違う、コーちゃんとは別種のクロマルハナバチ（以降、他のマルハナバチに倣って「クロちゃん」と呼称）のようです。まだ確定したわけではありませんが、メールマガジンに載せれば、より多くの方から情報をいただけるのではないかと思います、この情報を載せることにしました。

植原は北杜市でクロちゃんを確認しています。図鑑を見ると、山梨県はクロマルハナバチ分布域です。乙女高原にもいる可能性があるのですが、『乙女高原フィールドガイド マルハナバチ・ウォッチング』（2015 発行）には載せています。やっぱりいたか・・・と思っていますが、一つ、心配があります。クロちゃんが授粉用に使われていることです。以前はセイヨウオオマルハナバチがトマトやイチゴの授粉用にハウス内に放たれていました。ミカン箱大の段ボール巣箱が売買されていました。ところが、セイヨウオオマルハナバチは外来生物（＝外国産の外来種。外来生物法によって厳しく規制されている）なので問題視され、在来種で近縁のクロちゃんが使われるようになりました。クロちゃんは日本の在来種ですが、もし、もともとクロちゃんがいなかった地域に放たれたとしたら、立派な外来種です。では、もともとクロちゃんがいる地域なら逃がして大丈夫だと思いますか？授粉用クロちゃんは十中八九、別地域のクロちゃんがルーツです。もともとクロちゃんが生息する地域に放たれたら、その地域のクロちゃんと交雑し、その地域固有の遺伝子群が乱れてしまいます。結局、元々クロちゃんがいなかった地域でも、いた地域でも、授粉用クロちゃん（＝他地域のクロちゃん）が放たれてしまうのは問題なのです。植原は、今のところ、「自然分布のクロちゃんである。従って、乙女高原 7 番目のマルハナバチ」だと考えていますが、「農業用ハウス内に放されたクロちゃんがハウス外に出てしまい、乙女高原にやってきた」可能性が捨てきれません。市役所の農林課に尋ねたところ、「牧丘地区でのトマト、イチゴのハウス栽培は、今現在はないのではないのか」とのことでしたが、トマト・イチゴのハウス栽培について、何か情報をお持ちでしたら、ぜひ教えてください。また、乙女高原でクロちゃんらしきマルハナバチを見つけたら、ぜひご一報ください。



乙女高原は楽し～い！ ～小学生と観察～

◆笛川学園 4 年生の案内 6 月 30 日(火)

植田 幹夫

笛川学園「乙女高原自然学習 2026」を、4 年生児童 27 名、引率の先生 5 名（教頭、担任、主任、特別支援、養護）と乙女高原案内人 6 名で実施しました。当初 6/26（金）の予定でしたが、雨の為、6/30 の予備日に延期して実施しました。

9 時半ころ、児童や先生たちが乗ったマイクロバスが乙女高原ロッジ前に到着し、トイレを済ませて『始めの会』を行いました。リーダー児童の進行で、教頭先生の挨拶、乙女高原ファンクラブ代表世話人の角田さんの歓迎挨拶、案内するスタッフの自己紹介を行いました。今回の自然学習のテーマは「乙女高原の植物」と「乙女高原の保全活動」です。学習した成果を 1 人 1 人が「新聞」にまとめるということで、事前に色々学習してきたようです。



今日は 3 つのコース①ブナ爺コース、②谷地坊主コース、③草原満喫コースに分かれての自然観察で、児童はそれぞれ希望するコースに参加しました。担当する案内人は①ブナ爺コースが角田さんと渡辺さん、②谷地坊主班が植原さんと加藤さん、③草原満喫コースが赤松さんと植田です。今回は植物観察だけでなく「乙女高原の保全活動」が学習テーマになっている為、植原さんが作成した資料で、シカ柵の設置、草原の草刈り、遊歩道の整備などの保全活動について、案内人も事前学習しました。10 時少し前、3 つの班に分かれて出発しました。

ブナ爺班は草原のてっぺんまで上ってさらにヨモギの頭からブナ爺まで下り、帰りは元の道を通って戻るアップダウンのコースです。森の中で「一つ目小僧」のギンリョウソウやキツツキが木に開けた孔、シカ柵の外で鹿に喰われた草などを観察しました。富士山の頭だけでしたが見ることで、ラッキーでした。

谷地坊主班はシカ柵内で自然観察のあと、シカ柵の外に出て柵の内側と外側の違いを観察しました。シカ柵の外側は大きな葉っぱのマルバダケブキばかりです。マルバダケブキ以外はシカに食われてしまいました。「ゲゲゲの鬼太郎」のようになった谷地坊主を見て、盛り上がった株ができる仕組みを学習しました。また、飛んできたキアゲハがシシウドの葉に卵を産み付ける場面を観察できるチャンスに恵まれました。

草原満喫班は、草原に入って観察する前に、ロッジ前の広場にあるシラカバ、ダケカンバ、ヤエガワカンバの「カンバ三兄弟」を学習しました。乙女高原の案内板の所で、50 年前はスキー場だったこと、今でも大きな木が生えていない草原であることを確認しました。シカ柵を開けて草原に入ると歩く道（遊歩道）がふかふかです。秋に刈った草を遊歩道に敷き詰めて、遊歩道の土が雨で流されるのを防いでいることを学習しました。ツツジコースでは草原にボツンと残っているシラカバをみて、秋の草刈りで草原に生えたシラカバの若い木を

伐って取り除き、ツツジの咲く草原がシラカバ林になってしまうのを防いでいることを学習しました。5メートル四方の網で囲んだところでは、これが15年くらい昔に試験的に作ったシカ柵で、この柵の内外の植物の数を比べてシカ柵の効果を確認し、草原全部を囲む全長1kmに及ぶシカ柵に設置に繋がったことを学習しました。

11時10分、全部の班が予定通りロッジに戻り、ベンチに座って今日観察したことや学習した内容を確認しました。学習した結果を新聞にまとめるために予め用意した質問があり案内人が答えていました。11時半から『終わりの会』を行い、角田代表世話人からの「楽しかった？」の質問に全員が「楽しかったあ！」と元気な返事。「乙女高原に、是非また来てください！」の言葉で、6月の自然体験学習を終了しました。

◆笛川学園4年生の案内 9月1日(火)

【植物の様子を6月と比べよう班】

大堀 道也

初めて小学生の学習活動に参加しました。こどもたちへの伝え方って、どういうふうな形になるのか、こちらが勉強させていただく形での一日でした。朝9時15分には、TEKISENのネーム入りの青ジャージ姿の4年生27名がスクールバスで到着し、3班に分かれて整列。

私は植物班の担当でした。担任の先生のご指導によって、植物班では、①今咲いてる花のチェック、②5月に花を観察したアヤマやアマドコロ、レンゲツツジの今の形の確認、③この季節の花の特徴、が本日の課題ということでした。

班別の打ち合わせが終われば、子どもたちの頭の中には課題が既に入っていて、シカ柵をくぐる前、早くもグリーンロッジ脇に咲いてたアザミから自然探索がスタート。「フィールドガイド(花パンフレット)」の見方や検索の仕方について、ノアザミかノハラアザミかタムラソウか、子どもたちに判別のポイントを少しずつ伝えながら考えてもらい、時間を掛けて意見集約する形で結論に導きます。

車道脇の草むらでもゴマナなのかシラヤマギクなのか、柵内に入ってもアキノキリンソウ？オミナエシ？ハンゴンソウ？と、検索作業にチャレンジしてもらいました。

2時間近くを掛けて、咲いているいっぱいの花を知り、課題の①と②も達成(植物の形をスケッチしてもらったり、ワレモコウの枯れ花やツリガネニンジンの花の大きさをスケールで測ったり)、③はさすがに答えを出せませんでした。

小学4年生の自然学習って、どういう形なのかは、むずかしくてよくわかりません。学校でどういうカリキュラムを組んでおられるのかよくわかりませんし、自分の子どものアサガオ栽培キットの配布は何年生だったかも忘れました。ただ、学習指導要領だと、植物の雌しべ雄しべ、発芽とかは5年生段階での学習という割り振りのようです(3年生で身の回りの生物の成長と体のつくりを知り、4年生で植物の生長と季節、6年生で植物の養分と水の通り道を学ぶようです)。驚いたのは、4年生の皆さんが銘々、自分たちに課されたタスクは重々承知されていて、植原さんの案内(誘導?)に一生懸命に食い付いていたことです(もちろん、子どもさんにより個性発現の濃淡はありますが)。

一方的に知識を伝える(押しつける?)のでは児童も話に飽きるだけになってしまうのですが、問いかけによって、児童自身が既に知っている世界と結びつけて、それぞれの児童の好奇心に火をつける、発見する喜びを提供する、興奮が喚起される、そういう場面が繰り返されて、つくづく、子どもさんもそれぞれ、自分の世界を広げたいという欲求を強く持ってるんだなあ、一人ひとりが主人公になる時間を作ってあげることが大切だなあと感じました。(他のメンバーが学習に勢い込む雰囲気の中で、もがいているお子さんもいたかもしれませんが)(なお、教頭先生のお話では、笛川学園は、4年生が一番多い27名で、6年生が16名、新1年生が13名だそうです。牧丘三富ガンバレ!)以上、植物班の活動に参加させていただいたレポートでした。



【マルハナバチを調べよう班】

井上 敬子

はじめの会が終わって、3つの班に分かれました。マルハナバチの班には10名の子どもたち。ここで簡単なレクチャーです。今回、いるであろう3種類のマルハナバチ、オオマルハナバチ(オーちゃん)、トラマルハナバチ(トラちゃん)、ミヤママルハナバチ(ミーちゃん)の写真を見せながら、特徴を簡単に伝えました。そして、それぞれのハチに色分けして(オー:緑、トラ:青、ミー:赤、その他:オレンジ)、ワークシートの花の欄に、来ていたハチのシールを貼ることを確認しました。この班の担当は私と赤松さんの2人いたので、5人ずつの2グループ編成にして、草原をまわることになりました。

シカ柵の中に入ると早速、ヤマハギにミーちゃんが。「みんな集まって、見てごらん。小さくてクリーム色だよ。このハチは何?」「えーとミヤマ?」「そうだね。じゃあヤマハギの欄に赤いシールを貼ろう」子どもたち

はシールを貼ります。

「またいるよ。今度は黒と黄色のしましま模様があります。何でしょう?」「オオだね」と、やりとりしながら、マルハナバチをさがし、シールを貼ります。

「先生、あそこにもいます」「残念、あれはアブです。角みたいな触覚がないよ。マルハナバチは動き回るけど、アブはじっとしてることが多いね」

「その花の上にあります」子どもが見つめました。「あれは何か。明るいオレンジ色だよ」「ミヤマ?」「残念、トラです。花は何?」「トゲトゲがあるよ」「ノハラアザミ?」「ピンポン、トゲトゲのあるのがノハラアザミで、ないのがタムラソウです。青いシールをノハラアザミの欄に貼りましょう」

「今、タムラソウにとまっていたトラはどの花に行ったかな?」「となりのタムラソウ」「そうだね。マルハナバチは同じ花をまわって蜜や花粉を集めているんだよ」

花がたくさん咲いていて、マルハナバチもたくさんいて、なかなか先に進めません。途中でシールがなくなったという子もいて、先生からシールをもらいました。空には雲がけっこうあって、そんなに暑くはなかったのですが、歩きながらハチをさがしたり、シールを貼ったりで、少々疲れ気味の子もいました。木陰になるところで3回ほど給水タイムを取りました。前半だけで、ワークシートの欄に貼りきれないくらいマルハナバチがいて、花の写真の上にも貼っていきました。後半になると子どもたちも慣れてきて、ハチを見つけたり、どのハチかわかるようになってきました。

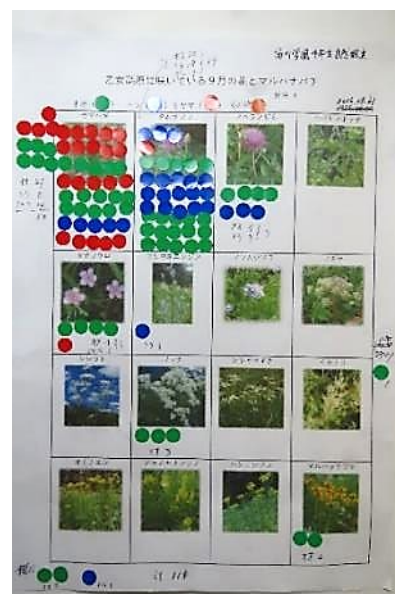
出発して1時間20分くらいでロッジ前に戻ってきました。後半グループの赤松さんと5人の子どもたちも戻ってきて、皆でベンチにすわって一休みしながら、少し振り返りをしました。

「マルハナバチがいっぱいいよかったね。一番人気の花は?」「ヤマハギです」

「何色の花にたくさん来ていましたか?」「紫色」「ピンク」「そうだね。何で紫色の花にいっぱいくるのかな?学校に帰って調べてみてね」

最後にマルハナバチは「かわいい、働きもの、おとなしい、頭がよい、体力がある」ことを伝えました。楽しかった、かわいかったなどの声もあり、よかったです。マルハナバチに興味を持つ子が増えていくと、いいなと思います。

今回はヤマハギに50頭(オオ21、トラ5、ミヤマ24)、タムラソウに39頭(オオ20、トラ18、ミヤマ1)、ノハラアザミ7頭(オオ4、トラ3)、その他タチフウロ、ゴマナなどにもいくつか来ていて合計すると何と110頭(オオ57、トラ27、ミヤマ26)というすごい数で、子どもたちがシールを貼るのも大変だったと思います。昨年の自然教室では15頭しかいなかったのに。嬉しい悲鳴でした。



マルハナバチがいっぱい

◆マルハナバチ調べ隊～盛夏編

8月1日(土)

植田 幹夫

2026年度の「マルハナバチ調べ隊～盛夏編」を8/1(土)に参加者21名(子供5名、大人16名、うち乙女高原世話人・ファンクラブ10名・・・植原さん、角田さん、井上さん、春日さん、野田さん、加藤さん、大堀さん、篠原さん夫妻、植田)で実施しました。

最初に始めの会を行い、写真「マルハナバチの種類とその特徴や役割」と紙芝居「マルハナバチの1年間」を使った学習会でマルハナバチについて基本を学び、午前中は決められたコースを1時間かけて歩いてマルハナバチを数える「ラインセンサス調査」、午後は参加者が各自で決めた花の前で15分間に訪れるマルハナバチを数える「待ち伏せ調査」を行いました。

10時から始めの会です。植原さんの司会で、代表世話人の角田さんの歓迎の挨拶、参加者の自己紹介を行いました。今回は21名の参加者です。遠く千葉県から駆け付けた参加者もありました。最初は座学でマルハナバチについて学習しました。植原さんが写真を使ってマルハナバチの役割やこれまでの調査の成果について、紙芝居を使った「マルハナバチの一年」では乙女高原案内人・春日さんの息子さんが説明してくれました。そのあと午前中の「ラインセンサス調査」の方法について植田が説明しました。

学習の後、さっそく草原に入って「ラインセンサス調査」です。草原のコースからツツジのコースを参加者全員で歩いて、咲いている花を訪れたマルハナバチの種類と行動を観察して記録します。真夏の草原には色々

な花が咲いています。入り口近くにはオオバギボウシが沢山の花をつけていてマルハナバチが飛んできて花の中にもぐり込んでいました。見ているとあちこちの花に次々と潜り込んでいきます。種類と花粉団子の有無と行動を観察し、ハチの種類、花の名前、花粉団子の有無、行動を記録します。さらに行くと薄紫の花クガイソウの花や鮮やかな赤紫色のノアザミで蜜を吸うマルハナバチが次々に観察できました。

日差しは雲に遮られていますが草原の中は草いきれでかなりの暑さです。シラカバの木陰で一休みして給水です。ツツジのコースに入ると旅をする蝶アサギマダラがヨツバヒヨドリの蜜を吸っていました。シモツケの花が咲きだし、子供達は線香花火だ！線香花火がいっぱい咲いていると言います。なるほど赤い蕾が火の玉で、白くて細い長い雄蕊が飛びだした火花で、なるほど線香花火だと感心しました。ログジに戻って丁度1時間で調査終わりです。井上さんの記録では80頭のマルハナバチが観察できたとのこと。

11時45分からランチタイムです。またまた植原さんから冷えた一口大にカットした甘いスイカ、角田さんから美味しいプラム、篠原さんから胡瓜漬けの差し入れがあり、参加者全員で美味しく頂きました。真夏の高原で食べる美味しい果物や野菜は最高です。いつも有難うございます。

12時45分から午後の「待ち伏せ調査」を行いました。参加者各自が好きな花を選んで、15分間観察し、その花を訪れるマルハナバチを記録します。調査方法の説明を聞き、12頭まで記録できる記録用紙を持って調査開始です。植田が選んだヤナギランとクガイソウはそこそこの人気で15分間で7頭、15頭でした。最後に出口近くで並んで咲いているヤマハギとシシウドを同時に観察しました。予想通りシシウドは人気が無く15分間でゼロでした。参加者各々15分間、2回調査してログジ前に戻ってきました。結果を井上さんに報告し、花別にマルハナバチの種類と1時間あたりに換算した頭数を集計しました。

14時10分から終りの会を行い、井上さんから調査結果の発表がありました。午後は11種類の花について調査し、一番人気の花はヤマハギで1時間換算して49頭、2番はクガイソウで36頭、3番はオオバギボウシで39.5頭でした。不人気なのはヨツバヒヨドリ、ノコギリソウ、シシウドでゼロでした。その後植原さんから御礼と、この後の訪花昆虫調査(8/9)、次回のマルハナバチ調べ隊(9/5)、草原に穴を掘って地面の中の土の層を調べる土壌調査(8/25)のお知らせがありました。

終わりの会終了後、道具や備品類をログジに収納して解散しました。今回はにわか雨にも降られず、薄雲りで日差しが遮られていて、それほど暑くもなく「マルハナバチ調べ隊」を実施出来ました。



◆マルハナバチ調べ隊～盛夏編 8月1日(土)

春日 飛鳥

6月28日の第1回マルハナバチ調べ隊は、生憎の雨により中止。たくさんのマルハナバチに会えるであろう、待ちに待った第2回～盛夏編の日がやってきた。小学6年の長男と小学2年の長女はファンクラブのフェロー制度のスタンプカードを「いっぱいにして、景品をもらいたい！」と、やや不純な動機でコンプリートに向けて張り切っている。

午前のラインセンサス調査で、心に残る出来事があった。長女がトラちゃんやオオちゃんの胸毛をやたらと触りたがり、成功すると「ふわふわ!!」と歓喜している。それを見た長男は「え。どれどれ」とクールにやっつけてのける。続いて他の女子たちも触る流れとなり「ほんとだ〜」「めっちゃかわいい〜」と小さなブームが生まれた。花粉集めを邪魔しないよう、指の背でそ〜っと撫でるように触る子もいて、まるで愛玩動物を愛でているかのようだ。

後日、長女に触ってみようと思った理由を聞いてみると、「なんか、モフモフしてたから、前から1回触ってみたかったんだよね〜」と、「サンリオ」や「ちいかわ」等のファンシー系ゆるキャラが好きな長女らしい、至って無邪気な台詞だ。

マルハナバチ調べ隊リピーターの子どもたちだからこそ、かもしれない。滅多なことでは刺さない穏やかなマルハナバチの生態を知って関わると、物理的な距離も心の距離もこんなに近くなる。過酷な自然環境を生き延びる「小さな命の強靭さ」を知れば、尊重しようとする姿勢も生まれる。虫嫌いな子どもが増加する現代社



会においては、小さな命に興味を持って近づき、営みを尊重しようとする敬意と慈愛に満ちた姿に、感動を禁じえなかった。

「そういえば、ハチの胸毛を触ろうなんて発想、いままでの人生になかった。第一怖い。一体どんな感触なんだ!？」と、無性に気になり出してしまった。子ども時代に何度も刺されたことでハチが大の苦手だった私は、恐る恐る人差し指をそ〜っと近づけて触ろうと試みたのだが、もう一步、というところで飛んで行ってしまふ。人知れず攻防戦を繰り広げた結果、私の勇気が足りないのか、マルハナバチが素早いのか、もはやわからぬまま、触れずじまいでラインセンサスは終了。

手が届きそうで届かない、ツンデレな(?)マルハナバチが、なんとも愛おしく思えてきたのだった。



◆マルハナバチ調べ隊～初秋編 9月5日(土)

井上 敬子

9月5日、初秋のマルハナバチ調べ隊が行われました。乙女高原に集まったのは10名、うち子どもが2名、参加者のほとんどが調べ隊の経験者ですが、はじめての人もありました。

はじめの会で、代表世話人の角田さんの挨拶のあと、マルハナバチの紙芝居です。小学4年生のたつるさんが読んで、お母さんがめくりの補助をしました。たつるさんは何度目かの紙芝居なので、じょうずに読んでくれました。その後、調査の説明があり、担当の割り当て(井上が先導、岡崎さんがはじめての荻原さんに教える、植原さんが公式記録をとるなど)があり、調査開始です。

午前中はラインセンサス調査、決められたコースを1時間くらいかけてまわり、そこで見られたマルハナバチの種類、花粉団子の有無、来ていた花、行動などを記録していきます。草原に入ると8月の調べ隊の時にたくさんのマルハナバチが訪れていたオオバギボウシが立派な実をつけていて、クガイソウも実になり、ヤマハギはまだ花は残っているものの実になりかけています。これらはみんなマルハナバチが受粉してくれたおかげで実になり種をつけて、来年もたくさんの花を咲かせることでしょう。

初秋なので、もうマルハナバチも少なくなっている頃かなと思いつつ、遊歩道を歩き始めました。すると、ノハラアザミにミヤママルハナバチ(ミーちゃん)がきていたのをかわきりに、タムラソウ、タチフウロ、咲き残りのヤマハギなどに次々とオオマルハナバチ(オーちゃん)、トラマルハナバチ(トラちゃん)、ミーちゃんがきて吸蜜しています。マツムシソウやアキノキリンソウではオーちゃんが花粉集めをしています。タムラソウが群生している場所では、トラやオオ、ミーがたくさんいて、記録用紙が足りなくなるくらいでした。ハバヤマボクチには1つの花にトラが2、3頭も群がって吸蜜しています。そして白い花粉団子をつけていました。オオは花粉団子をつけているものはほぼいなかったのですが、トラやミヤマは花粉団子をつけたものが多かったです。ということはまだ子育て中なのでしょう。始めて参加した荻原さんも毛むくじらのマルハナバチをかわいいと言って見ていました。ほんとにマルハナバチはかわいくて、賢くて、働き者で、愛おしくなりますね。次々とマルハナバチが現れるので、なかなか進めず、1時間半くらいかかってログ前に戻ってきました。

みんなで昼食を食べ始めましたが、植原さんはたくさんの記録をまとめるのに大変そう。いつものようにいろいろな差し入れを美味しくいただきながら、公式記録の発表です。なんと133頭ものマルハナバチがいたとのこと。人気のあったのはタムラソウ、ノハラアザミ、ヤマハギでした。

午後は待ちぶせ調査です。私はノハラアザミとヤマハギとアキノキリンソウの前で15分間ずつ、マルハナバチを数えました。ノハラアザミには17頭、ヤマハギには13頭、アキノキリンソウには3頭でした。皆、それぞれ好みの花の前で15分を2回調査して、もどってきました。私と岡崎さんで記録の集計です。皆が調べた花とマルハナバチの種類と数を集計して、1時間あたりに換算しました。その結果、ベスト3は午前と同様で、一番人気の花はタムラソウ、次がノハラアザミ、そしてヤマハギということでした。

いつも初秋はマルハナバチが少なくなっているのに、今回はたくさんのマルハナバチがいて、びっくりでした。8月の調査の時より増えています。そして、まだ花粉団子をつけているハチも多く、子育て中です。これはどういうことなのでしょう。猛暑の夏を避けて、涼しくなって子育てをしているのでしょうか。そうならこれも温暖化の影響なのか、来年以降の様子もみていく必要を感じました。



どの花にどんな虫がやってくるのかな？

◆訪花昆虫調査 6月 6月23日(火)

植原 彰

調査予定日は6/20でしたが、雨予報だったので6/23の予備日に変更しました。最近は当日・翌日・翌々日までの詳細な天気予報が見られるので(予報の信頼度はまた別の話です)、前日ではなく前々日には実施の判断ができ、ありがたいです。参加を申し込まれた方には予定日の前々日に延期情報をメールできました。

さて、6/23には高槻さんはじめ全部で11人が調査員として参集してくださいました。高槻さんが往復の植原の車の中で、いつも「乙女高原の皆さんはとても協力的だし、お昼がものすごく楽しい」とおっしゃっていますが、その通りだと思います。

開始時刻の10:00になったら、代表世話人の角田さんのあいさつ、全員自己紹介に続いて、高槻さんから調査についての説明がありました。その折、調査員の篠原さんがとてもわかりやすい資料をお持ちで、まわりから「この資料いいですね」とか「この資料がほしいな」という声が出ました。私も見ましたが、グラフや図が多くて、わかりやすい資料でした。それにしても、どこかで見たことがある資料だなと思ったら、昨年、この調査のために作った資料でした。ありや。昨年のことをもう忘れていました。次の調査には印刷して、みんなの分を持ってきますね!!

その後、遊歩道を全員で歩いて、今、たくさん咲いている花の確認をしました。アヤメ、オオヤマフスマ、ヤマハタザオ、キンポウゲ・・・それらが今日の重点観察植物になります。みんなで確認後、2~3人のグループに分かれ、調査する遊歩道の範囲を決めて、調査しました。特定の植物(たとえばアヤメ)の前に陣取って、しばらく(10分程度)、訪れる昆虫がいないか待ち伏せします。もし、昆虫が来たら、蜜を吸っているのか、花粉を集めて(または食べて)いるのかなどの行動を観察し、記録します。それらが済んだら、次の花の前に移動する・・・のルーティンです。12時をめぐりにロジ庭に集合し、調査内容を簡単に共有して、お昼にしました。どうも今日は気温が思ったほど上がらず、昆虫たちの活性が低いようです。

お昼は「いつものように」盛り上がりました。篠原さんからきゅうりの浅漬や和菓子、角田さんからモモやスモモ、植田さんからパイナップル、臼田さんから茶菓子の差し入れ(ほかにもあったら、ごめんなさい!)。北島さんの写真集をみんなで見て「これは注文したい」と希望が続出したのもこの時です。

午後も同じメンバー・同じ場所で調査しました。気温が低くて昆虫があまり出そうもないので1時間に限定しました。私と加藤さんのペアは「森のコース」で、午前中はエゾノタチツボスミレとニガナの前で、午後はギンリョウソウの前で待ち伏せしましたが、エゾノタチツボスミレとギンリョウソウは不当たりでした。

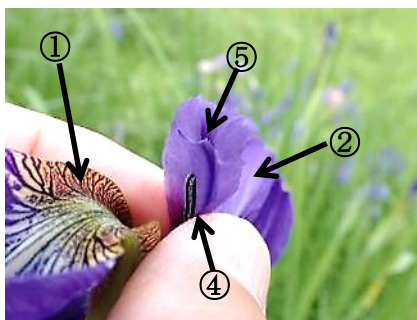
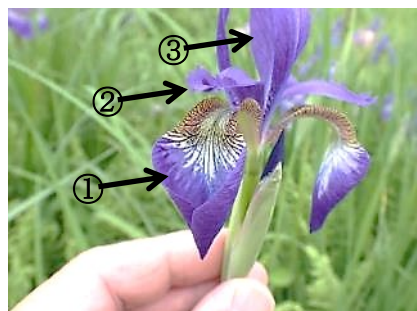
さて、今回、お昼に盛り上がったのが「アヤメのめしべはどこにある？」という疑問です。渡辺さんから「皆さん、アヤメのおしべはここにあるのがよくわかりますが、めしべはどこにあるのか知っていますか？」と問題提起されたのがきっかけです。そういえば意識したことないなあ。

皆さん、アヤメの花がどうなっているのか言葉で説明できますか？ 植原が試してみますね。

アヤメの一番大きな花びらは、まるでペロのように垂れ下がっています①。2番目に大きな花びらは、まるで旗のように真上に突き立っています③。一番小さな、長細い花びらは、ペロ花びらの上に、まるでペロ花びらをカバーするように付いています②。これら下から「ペロ①・カバー②・旗③」の花びらセットが3セット、ま上から見ると輪のように付いているのがアヤメの花です。

カバー花びら②をそっとめくると、カバー花びらに隠れるようにおしべがあります④。おしべ④は花粉を出しているので、それとすぐにわかります。でも・・・確かにめしべが見当たりません。かわいそうですが、一つだけ花を分解し、丁寧に観察したのですが、それらしいものは見つかりません。

今度ははじからカバー花びらをひっくり返して、めしべを探しました。注目したのはカバー花びら②です。なぜかという、マルハナバチがアヤメを訪れているときのことを思い出してみると、カバー花びら②とペロ花びら①の間にハチがもぐっていきますから、おしべ④と同じような場所にめしべがないと、ハチの体を使って送粉させることはできないからです。カバー花びら②をめくっているうちに、あることに気づきました。カバー花びら②の多くは、花びら先端の下側に白い部分があって、少し出っ張っています⑤。この白い部分がめしべでないと、マルハナバ



チの体を利用した送粉はありえないと思いました。

午後の調査を一部そっちのけで(すみません)、アヤメの花を見まくり、調査後、「乙女高原の本棚」から植物図鑑を持ってきて開いてみると、花のつくりを説明する図の中に「アヤメ科の花」の図があり、まさにカバー花びらの先端の部分が雌しべ⑤と説明されていました。仮説通りでした！

ということで、アヤメの花のカバー花びら②はじつは花びらではなくめしべ⑤でした(これにもびっくりです)。旗花びら③は内花被片、ペロ花びら①は外花被片というそうです。

◆訪花昆虫調査 7月 7月12日(日)

槇田幹夫

2026年度3回目の「訪花昆虫調査」を7/12(日)に高槻先生と乙女高原ファンクラブの会員他の参加者13名で実施しました。6月に続いて「花を訪れる昆虫の種類と数とその行動」を調査するもので、担当するコースを歩いて、咲いている花を訪れる昆虫の種類、回数、その行動(蜜を吸う、花粉を食べる、その他)と時刻を記録する調査です。

10時から始めの会です。参加者の自己紹介の後、高槻先生からこれまでの調査の結果と調査方法の説明がありました。初めての参加者向けに配布した資料を使って、調査の背景や目的、調査対象の花の造りや昆虫の特徴について詳しく説明して頂きました。

その後、植原さんから、班分けと担当するコースの説明がありました。A班は伊佐治さん、篠原(厚)さん、深澤さんで担当するコースは森のコース、B班は篠原(ふさえ)さん、槇田、手塚さんで担当するコースは草原のコース、C班は井上さん、大西さん、加藤さんで、草原のコースの入り口近くです。D班は大堀さん、田中さん、松村さんで、草原の道路側とツツジのコースです。高槻先生と植原さんは別動隊で、「植生調査」を行いました。

調査の前段として草原に咲いている花の確認と双眼鏡を使った観察の練習をしました。オオバギボウシ、クガイソウ、ヨツバヒヨドリはまだ蕾で、キンバイソウ、ノアザミ、シモツケが咲きだしていました。タチフウロやオオヤマフスマが咲き残り、紫色のアヤメが僅かに残っていました。

高槻先生からノアザミの花の造りについて実物をばらして説明がありました。一つの花のように見えるのは筒状の小さな花が沢山集まったもので、棘のある総苞で包まれていて、小さな花一つ一つに蜜や花粉があるので、昆虫にとって移動せずに吸蜜や花粉を食べる・集めることができるということです。

各班に分かれて調査を開始しました。B班はタチフウロ、キンバイソウ、ヤマオダマキ、ノアザミ、シモツケなどの花に集まっている昆虫を観察しました。途中、花ではなくイケマの葉っぱに、背中の赤いバツ印の模様が目立つカメムシ〔ジュウジナガカメムシ〕がいっぱいくっついていてのをみて、三人で「ウワッ」と声をあげてしまいました。コースの終わり近くでは、シモツケの花にマルハナバチが次々と飛んできて、あちこちの花の上を這いまわって花粉を集めていました。双眼鏡で見ると、黒くてお尻の先がオレンジ色のコマルハナバチ、三色の縞があるオオマルハナバチ、小さくてレモン色の毛があるミヤママルハナバチでした。5, 6頭が忙しく動き回っていました。調査終了後、富士見台で雪のない富士山を見てからロッジに戻りました。

昼食時には高槻先生からチーズケーキなどのお菓子の詰め合わせの差し入れがあり、そのほかにキュウリの漬物、トルコのお土産、カットしたニュージーランド産のリンゴ、一口サイズに切ったスイカなど沢山の美味しい差し入れがあり、楽しいランチタイムでした。昼食が終わって荷物を車に戻す時、緑色の大きな芋虫が駐車場を這っているのを見つけました。5cm位の大きさで緑色の毛が刈り込んだように生えていて、さわるとモフモフします。図鑑で調べるとヒメヤママユの最終齢の幼虫でした。

午後の調査は、午前中観察が少なかった花(キンバイソウ、チダケサシ、ヤマオダマキ、オオヤマフスマ、タチフウロなど)を重点的に観察しました。4班全部が草原からツツジのコースで調査しました。

チダケサシには甲虫が潜り込んで(蜜を吸って)いました。数えると7, 8匹います。すぐ隣の花にも5, 6匹、その隣の花にも5, 6匹いて、一株に咲いた3つの花序に20匹も来ていました。タチフウロにはなかなか虫が訪れず、甲虫が1匹やってきたただけでした。ヤマオダマキには訪れる昆虫がゼロでした。蜜が少ないのか、それとも花の造りが特徴的なので特定の昆虫に限定して来てもらっていると思われます。

駐車場近くではキンバイソウが沢山咲いていました。マルハナバチがやってきて、次々とキンバイソウの花に止っては動き回り、次の花に移動していきます。双眼鏡で黄色い花粉団子がついているのが観察できました。オオヤマフスマを訪れる昆虫は少なく、暫く見ていると小さな甲虫が一匹やっと来てくれました。



14時30分に調査終了し、恒例の集合写真をロッジの前で撮り、使った備品をロッジに戻して解散しました。今回の調査ではアサギマダラをみる事ができなくて残念でしたが、他の班では観察できたとのことでした。

◆訪花昆虫調査 8月 8月9日(日)

和平拓馬

8月夏本番の乙女高原、今回初参加の訪花昆虫調査。天気も午前中は雨の心配はないとの予報を聞き、今回も楽しみに乙女高原へ向かいました。前日メールで送信された調査の説明書も確認し、また雨にも備え雨具も準備し現地には開始約30分前に到着しました。

参加者が全員集まり、高槻先生から調査方法の説明を受けて調査開始。自分にとって初めての内容の活動だったので少し緊張もありました。しかし同じ調査班の篠原厚さん、古屋よしこさんの親切なフォローと協力のおかげで緊張も解けて余裕を持って調査活動ができました。

調査に慣れてくると、調査対象の昆虫と植物に興味湧いてきて

「この形の花にはこういう特徴の昆虫が訪れるのか！」

「ハチとアブを実際に観察するとこの特徴で区別がつくのか！」

「実際にマルハナバチを見るとかわいいな」

「トンボは花の花粉や蜜を食べに来る昆虫を捕食しに来るのかな？」

「こんなゴマ粒サイズの甲虫がいるのか！ちょっと驚き」

と、たくさんの発見があり、とても楽しい調査活動になりました。乙女高原の植物と昆虫の共生関係をより深く知ることができました。

午後からまた活動再開して頑張るぞと意気込んでいましたが、残念ながら雷雨となり中止となってしまいました。しかし、ロッジの中で今日の感想や意見を交わせる時間ができ、締めの高槻先生の話聞いて「高槻先生は本当に乙女高原やこの分野のことが好きなのだな、これからもこういう活動があったら積極的に参加し協力したい」と思いました。

今回の訪花昆虫調査は初参加でわからないこともありましたが、参加者さんのフォローや協力もあり、肩の力を抜いてとても楽しく、かつ、夏の乙女高原の自然にも触れられて有意義な活動となりました。またこの訪花昆虫調査には参加したいです。



◆訪花昆虫調査 9月 9月18日(金)

榎田幹夫

2026年5回目の「訪花昆虫調査」を9/18(金)に高槻先生と乙女高原ファンクラブ会員4名で実施しました。当初予定した9/16が雨で中止になり9/18に延期したものです。天候不順な昨今ですが、当日は秋晴れに恵まれました。9月は、6月と7月に続いて花を訪れる「昆虫の行動調査」です。予め選んだ、咲いている花に訪れる昆虫の種類とその行動(蜜を吸う、花粉を食べる、その他)を記録するものです。

10時から始めの会を行い、高槻先生から8月に実施した「訪花昆虫調査」の結果について説明がありました。5月から10月までの昆虫が訪れた花の数の推移、花の形(皿型、筒形、キク科の集合花)で区別した訪れた昆虫の種類と数、2013年8月と2026年8月の調査データの比較について配布資料で詳しく説明して頂きました。その後、植原さんから今回対象の花はアキノキリンソウ・ゴマナ・ヤマラッキョウ・オケラなど、担当は臼田さんと加藤さんと榎田の3人、高槻先生と植原さんは「植生調査」を行うとの説明がありました。

10時半から調査開始しました。ロッジ前の入口から草原に入って、草原のコースを上って富士見ベンチまで行き森のコースでロッジに戻りました。調査した花はノハラアザミ、アキノキリンソウ、タムラソウ、マツムシソウ、ハバヤマボクチ、ゴマナでした。ヤマラッキョウはまだ蕾、オケラの花は見つけられませんでした。午前中の調査では、ノハラアザミとタムラソウが昆虫の人気大で、ハエ・アブ・マルハナバチ・ヒョウモンチョウ・セセリチョウ・シジミチョウなど色々きました。面白かったのは、以下のことでした。

①カメムシがタムラソウの花に頭を突っ込んで吸蜜(吸汁?)している

②足の長いガガンボが「腕立て伏せ」しながら吸蜜している

③花が終わったように見えるハバヤマボクチでミヤママルハナバチが5、6頭も吸蜜している

富士見ベンチからの富士山は半分雲に隠れていました。

昼食時には高槻先生から地元名産の「お菓子の詰め合せ」、植原さんから鳥取土産の「梨と蜂蜜クッキー」、臼田さんから「饅頭」と沢山の美味しい(甘い)差し入れがあり、ご馳走様でした。鳥取砂丘の土産話や島根・鳥取の町による言葉(方言)の違いなどの話題で楽しいひと時でした。

午後は調査の続きです。草原のコースから駐車場、ツツジのコースを回りました。午前のコースではなかつ

たオミナエシとリンドウで調査しました。リンドウは1株だけで花は4つです。筒形の花で、ノハラアザミやタムラソウのような集合花ではないので、訪れる昆虫がいるかどうか心配しながら暫く観察していると、嬉しいことにミヤママルハナバチが1頭花に潜り込み、花から出てくるところを写真に撮ることができました。

タムラソウではあちこちの花で、数匹のガガンボが体をゆすって吸蜜していました。別の花ではカメムシとオオマルハナバチが仲良く並んで吸蜜していました。ノハラアザミではシジミチョウやセセリチョウ、ヒョウモンチョウが吸蜜していました。

15時に調査終了、恒例の集合写真をロッジの前で撮り使った備品をロッジに戻して解散しました。

晴天だったので、花を訪れる沢山の昆虫が観察できました。

乙女高原の地面の下はどうなっているの？

◆土壌調査見学会 8月25日(火)

春日 龍琉 (小学校6年生)

土壌調査レポート「微生物と土と草は全部ないと生きていけない」

僕は、母と妹と一緒に、草刈りボランティアやマルハナバチ調べ隊などの自然を守る活動に参加してきました。今回の土壌調査は、2004年以来2度目の調査だそうです、東京農業大学の加藤 拓教授と大学院生4人が調査に来ていました。普通では体験できないことなのでとてもワクワクしながら行きました。

森林コースに行き、掘り起こした後の土の断面を見せてもらいました。加藤教授から、上の20cmぐらいある黒い層は、微生物が分解した落ち葉や根などの有機物、微生物がたくさん棲んでいる証拠だということを教わりました。黒い層が黒い理由は、微生物が有機物を分解したことでできた炭素の黒でした。黄色い粘土層には有機物も微生物も少ないこともわかりました。森林の土は黒い層が少ない、栄養が少ない土壌ということもわかりました。

土を触らせてもらったら、黒い層はふわふわと軽く感じ、黄色い層は少しねちょねちょだな、と感じました。においをかぐと黒い層は草のにおい、黄色い層はにおいませんでした。黒い層のふわふわは、植物の細かい根が入り込むことや、微生物が有機物を分解したことでたくさんの隙間ができた「団粒構造」だとわかりました。

加藤教授がフェノールフタレイン紙に黒い層と黄色い層の土を取り乗せてフッ化ナトリウム溶液をかけると、なんと赤色に変化しました！ 活性アルミニウムテストといって、黒ボク土かどうかを調べる試験だそうです。1分以内に赤色に染まる場合は、火山灰でできた黒ボク土の証拠。「残念ながら乙女高原の土は火山灰なので、酸性が強くリン酸が効きにくいので農作物が育ちにくいけれど、木が育ちやすい環境だった！」ということがわかりました。

次に見に行った草原コースの土壌は、森林エリアとは全く違い、黒い土の層が70cmほどあってびっくりしました！なぜ黒い土の層がぶ厚いかというと、雨で森林の土や有機物、落ち葉が流れてきたり、毎年草が生えては枯れて、生えては枯れ、を繰り返すことで草原の根が分解され分厚く溜まっていくからだ、と加藤教授から教わりました。

乙女高原案内人をして母から、「乙女高原は1000年以上前から里山の『秣(まぐさ)場』『茅場』として利用されてきたんだよ。昔の人々が草を刈って家畜の肥料にしたり、茅葺屋根の材料にしたり、畑に『刈り敷き』をして養分を補ったりするために、大切にされていたんだよ」と聞きました。現在、乙女高原ファンクラブでは20年以上草刈りを続けることで草原を守っています。毎年、人の手で草を刈ることも、栄養たっぷりの分厚い黒い土の層をつくることに役立っているんだ、と知りました。

黒い土の層の成り立ちを知って、微生物と土と草は全部ないと生き物は生きていけないんだ、と思いました。人間もその生態系の輪の中に入っていて、乙女高原は人間が手入れしているから成り立っている、ということを土壌調査で知ることができました。

今後、僕が草刈りボランティアに参加するだけでなく、草刈りボランティア体験や生態調査のような、乙女高原の生態系の豊かさや乙女高原の歴史を子どもたちが知る活動を続けて、一緒に守ってくれる人を一人でも増やしたいと思いました。



「乙女高原の地盤がどうなっているのか？」

もちろん“乙女高原”という場所についての興味は尽きませんが、よくよく考えてみれば、人が弄（いじ）くりまわしていない土壌をみるということは、一般人にはなかなかない機会であって、今回は貴重な体験であったと、今になって思い返しています。

黄色い粘土層の上に黒土の層が数十センチ見えました。黄色は火山灰で、黒土の黒は炭素の色。

「これだけの（黒土の）厚さになるのにどれだけの時間がかかったのだろうか？」

そんなことを漠然と思って眺めていると、そもそもこの炭素はどこからやって来たのだろうか？ あっそうか！ これは空気中の二酸化炭素由来に違いない！ そして二酸化炭素を食らい炭素を排出し、ここに撒き散らしたのは植物や微生物の仕業なのだ！と、昔習った教科書の知識から理屈だてて納得したのでした。しかしそう思い至ったその直後、得も言われぬ感動に襲われたのです。

それは生命のいじらしい活動に思いを馳せたのではなく、いや！それも多少ありますが、それよりは人間のスケールを遥かに超えた“悠久の時”を感じた、といったほうが近いかもしれません。とにかく理屈を超えた直観なのでした。

私は星をみる趣味があるのですが、星を見ているとこの思いに囚われることがよくあるのです。その現象がどうして起こるのか？ 自分でもよくわからなかったのですが、最近こう思うのです。

普段、何事においても人間のスケールに囚われ近視眼になりがちな現代生活。そのちっぽけな見識の、そのちっぽけさ加減を忘れてのことへの解毒剤であると。

これは私の勝手な思い込みでしかありませんが、果たしてどうなのでしょう？

今回の土壌調査見学会のレポートという趣旨からは随分と脱線してしまったようですからこの辺でやめておきます。

最後に、貴重な機会を作って頂いた東京農業大学の加藤教授や学生の皆様、本当にありがとうございました。



遊歩道を歩きやすく

◆遊歩道の草刈り 7月18日(土)

和平拓馬

梅雨が明けてきて夏本番を迎え始めた乙女高原。今回の遊歩道の草刈り活動を待ち望んでいました。しかし、あいにくの雨。本日の活動は出来ないのではと不安を煽られてしまいました。雨具を準備し早朝に出発。高速道路を走っている最中、長野県も山梨県も雨は降り続き「大丈夫かな？」と心配が付きまといました。

無事に乙女高原に到着、朝から降っていた雨は弱まっており、予定通りに行われるとのことでとりあえず一安心、活動に取り掛かり遊歩道の草刈り開始。初めての内容の活動でしたが他のファンクラブのメンバーさんが丁寧に教えてくれて順調に草刈りができました。

その刈る対象の植物のひとつに「イタドリ」※という植物があり、「昨年の養成講座で購入した乙女高原大百科に記載されていた植物の名前だ！ 確か厄介者扱いされていた植物だった気が…」と気付き、「自分も乙女高原の知識が少しずつ蓄積してこのファンクラブの一員として活動できている」と小さな成長を実感しました。

気づけば乙女高原ファンクラブに入会して早一年、去年は樹名板設置、植生調査、大イベントの草刈りボランティア、今年一発目に遊歩道整備と様々な活動に参加してきました。活動に参加するたびに乙女高原および自然を守る活動に貢献しているという実感が湧き、モチベーションも上がり「次はどんな活動に参加しようかな？」と楽しみに感じるようになりました。

次こそは天気恵まれた条件のもとで気持ちよく野外での活動に挑みたいと思う次第です。本日は雨天の中での活動お疲れ様でした。それと自分の農園で栽培した桃をくださった角田さん、甘酸っぱい桃をありがとうございました。我が家で美味しくいただきました。

※

※

※

※

※

※（植原 注）和平さん、イタドリが『乙女高原大百科』に載っていたことを思い出すなんて、すごいですね。その通りです。2001年、つまり、乙女高原ファンクラブ発足当時から「繁殖力旺盛なイタドリが増えてしまい、そのほかの乙女高原の植物が肩身の狭い思いをしているんじゃないか」との意見があり、議論の結果、イタドリだけを刈ってみようということに



なりました。2004 年 6 月には設定範囲内で約 480kg のイタドリを刈り、草原の外に出しました。2 年目の 2005 年、同じ範囲で半分以上の約 170kg でした。3 年目の 2006 年は、2 年目とあまり変わらず約 150kg でした。2 年目も 3 年目も最初の年の約 1/3 で、刈った効果が出たと評価し、3 年で終了しました。

シカ柵外では、シカはイタドリをよく食べています。シカ柵内ではイタドリが柵に保護されて繁殖し、猛威を振るう可能性はあります。とはいえ、イタドリは在来種ですし、イタドリを生活の場としている生きものは乙女高原にたくさんいます。イタドリを選択的に刈り取るかどうかについては今後、慎重に考える必要があります。とはいえ、遊歩道ぞいに、あの大きなイタドリが生えていたら歩きにくいので、遊歩道沿いは他の植物同様、刈ってしまってもいいのではないかと思います。



初夏、草原の中にニューッと伸びてきたイタドリ。これから傘を開くように葉を茂らせ、イタドリの下は、草原なのに日陰になってしまう (2005. 6. 11 撮影)

乙女高原を案内しました

◆乙女高原案内人活動 7 月 18 日(土)

角田敏幸

私と松林さんの二人で夏の案内人活動を致しました。午前 8 時 30 分に植原さん(事務局)より指示をいただいた品々をロッジ前に運んで、机の上に並べて案内活動の準備を整えました。

8 時 10 分に現地に着いている小林さんから草刈りは濃霧で中止した方が良くと私に連絡が入りましたが、雨天決行なので実施するむねを伝えました。次々に乙女高原の草刈りに会員の皆さんが集まって来て下さり、9 時にロッジ前に集合して頂き、草刈りの場所、注意事項等をお知らせして 9 時 20 分、小雨の中、カップを着用して手刈りの人(和乎さん、野田(瑞)さん、野田(和)さん、臼田さん、大堀さん、篠原(厚)さん、篠原(ふ)さん、芳賀さん)、刈り払い機の方(私、三村さん、小林さん、青山さん)が草原内と林道沿いに別れて作業を開始しました。刈り払い機のエンジン音が心地よく草原内に響き、濃霧と霧雨に相まって幻想的な雰囲気を醸し出してくれました。



9 時 40 分、案内活動をしている松林さんの所に「スズメバチに刺された」と三村さんがやって来て、私が「ハチに刺された時の救急セットがロッジ内にあるので、もって来て」と松林さんをお願いし、持って来てもらったのですが、頭部なので髪の毛があり、ポイズンリムーバーで吸引できず、30 分位ヒリヒリすると言っていました。なんとか収まりました。東部にこぶが出来たように膨らみが出て心配しましたが、1 時間位で痛みは治り、ほっとしました。保険に加入しているので、帰宅後お医者さんにかかったら連絡下さいと言っておきましたが、連絡がなくて、安心致しました。

9 時 50 分頃、今度は「虫に耳を刺された」と篠原(ふ)さんがやって来ました。観ると真っ赤に耳が膨らんでいるので、またまた、松林さんが救急セットで対処。痛みはやはり 30 分位続きましたが、篠原さんなんとか大丈夫でした。同じように保険に加入している件を伝えましたが、大丈夫で安心致しました。

小雨が降っていたので、訪問者は県外から来た女性 1 人のみでした。芳賀さんが友達から預かって来た寄付金を受け付けて、この日は 15 時に終了致しました。

※翌々日、植原さん宅に報告に伺うと、刺したハチはホンシュウキオビホオナガスズメバチというハチだったそうです。

◆乙女高原案内人活動 7 月 19 日(日)

角田敏幸

7 月 19 日、私と松林さんの二人で夏の案内人活動を 10 時から 15 時まで行いました。小雨なので昨日と同様にロッジ玄関前での案内活動でした。この日も小雨が降ったり止んだりの天気、気温は 17 度。下界は猛暑日だったそうで、家に帰って家内に聞くと「雨は降らなかったよ」と言われ、ビックリ。

会員さんの熊谷さんご夫妻が三島市から乙女高原に来て下さり、ご寄付をいただきました。また、甲州市の佐藤さん(非会員)が来て下さり、乙女高原ファンクラブの保全活動にもものすごく共感してご寄付をいただきました。

やはり雨とワールドカップサッカーで訪問者が少ないのか！ 15 時で後片付けをして夏の案内人活動を終了しました。

これから乙女高原は一番綺麗な草原になるので、皆さんに訪れて欲しいです。

7月26日(日)10時頃伊豆函南の方から来たという女性5人を、森のコースから富士見百景、草原コースを案内した。ファンクラブ入会者もいて、高原には幾度か来た人もいるグループであった。出発前には、角田さんのファンクラブの成り立ちなどの説明により、2名ファンクラブに入会していただいた。1000名も間近と聞いた。ロッジ方向に雨雲のかたまりがあり曇り空。

スタート前には、双眼鏡の使い方を角田さんから習い、自己紹介をしてゲートを開け、中に入る。コースの説明看板の前で、グループが昼までに戻りたいことも含めコースを決る。歩き始めて少しすると遠くでカミナリも聞いたが森のコースを進む。スタート時の草原と比較して森の中の涼しさに気づいてもらい、また、シカ柵の内側、外側の違いに気づいてもらい、シカ柵が無かったらどうなるかなどを話しがら登る。

カラマツの森のところで皆さん、フシグロセンノウを一輪見つけ感激で盛り上がり、それには「待っててくれたんだね」の声かけをして、富士山展望台にて休憩、水分補給をした。カンバ三兄弟のところのギボウシの群生の所で「皆さん、ここどんなに見えますか？」の声かけをしたら、「綺麗」「葉の筋がすごい」の答え。レンゲツツジの群生地では、その葉っぱの木を問い、花が咲いている時期を想像してもらった。

アサギマダラは見られないかと話しながら来たが、やっとヤエガワカンバの林床のところのヨツバヒヨドリに一頭ぶら下がっているのを見つけ、双眼鏡で観察し、海を渡る蝶、マーキングなどの話を共有し感激した。ヤナギランの群生地でも双眼鏡で観察し、双眼鏡の良さをみなさんも知った。しかし、拡大鏡としての良さまでは至らなかった。

コース中にチダケサシについてトリアシショウマとの違いを私もはっきりしていなかったもので、皆さんが持っていた図鑑で調べ、納得した次第。コース巡りを終了時には、草原が森に変わらないように人が関わって、今このような花咲き昆虫呼ぶ草原になっている事を伝え、また時期を変えて来て下さることを話し散会した。今回の案内は乙女高原案内人になって初めての案内でした。一緒に観察と乙女高原から学べる自然環境と、研修でのことを頭に描き一緒にコースを歩いたがうまくできず、もっと案内をして学ばないと思った次第です。



【予 告】 第24回乙女高原フォーラム テーマは“クマ”

【第24回 乙女高原フォーラム】

◆日 時：2027年1月31日(日) 午後1時～3時30分

◆会 場：夢わーく山梨 (〒405-0018 山梨県山梨市上神内川 1348 電話 0553-22-3111)

◆テーマ：クマ問題を、みんなで考えよう ～ツキノワグマの生態とつきあい方～



最近、日本各地でクマ出没が大きな社会問題になっています。残念ながら人命が失われたり、市街地にまで現れるケースもあります。乙女高原でクマ出没は確認されませんでしたでしたが、念のため、昨年(2025年)秋の「草刈りボランティア」は中止となりました。

ツキノワグマは本州最大の野生動物です。爪は丈夫、力も強いので、出会ったらひとたまりもありません。一方で、日本の生態系の昔からの一員であり、植物のタネを広範囲にばらまくなど、日本の生態系が正常に機能するための大切な役割を担っています。また、温暖化、少子高齢化や過疎化による耕作放棄地の増加など、クマ問題の背景を意識しなければ、問題の解決は難しいと思われます。

今回のフォーラムでは、ツキノワグマの特徴や暮らしぶりをときに広く、ときに深く探ります。そして、どうすれば上手につきあっているかを、みんなで考えましょう。

◆スペシャル・ゲスト：小池伸介(こいけ・しんすけ)さん 東京農工大学大学院農学研究院・教授。

1979年、名古屋市生まれ。博士(農学)。専門は生態学。現在は、栃木県・群馬県の足尾・日光山地、神奈川県丹沢山地などにおいてツキノワグマの生態や森林での生き物同士の関係を研究している。著書に『ツキノワグマのすべて』(文一総合出版)、『ある日、森の中でクマさんのウンコに出会ったら』(辰巳出版)、『タネまく動物』(編著、文一総合出版)など。2024年よりNGO日本クマネットワークの代表も務める。

役立たずの目になっちまったよ、でも感じていたいんだよ。何もしなくていいんだ、チョウがたくさんとんでいる草原のど真ん中に、ただ突っ立っているだけで。

昆虫を描いて生きてきたその老人と出会ったとき、すでに老人の視力はほとんどなかった。過去に描いたイラストはパンフレットとして残り、八王子市内で配布されているが、もう作品は生み出されないし八王子から消えてしまったチョウもいる。

今年、私は絶不調だった。外に出れば雷、定点観測の林道は工事、追い詰めたチョウには逃げられ、二度と戻って来なかった。とりわけこたえたのが車の故障だ。信号で停まるたびにエンスト気味になるし、アクセルを思い切り踏んでも時速 40 キロしか出ない。これが冬ならかまわないが、チョウのシーズン只中だからたまったものじゃない。老人を乙女に連れて行こうと案を練っていたが、そんな車に乗せるわけにもいかない。

この不調を考えてみるに、初詣でこう願をかけたことが原因なのだ、今年はオオウラギンヒョウモンとゴイシツバメシジミだけ撮影できたならそれでいいです、それだけで充分なのです、と。

7 月に入って九州へ遠征した。2 月に航空券や宿の手配をしたにもかかわらず、連続する台風と梅雨明けの猛暑を掻い潜り、ありえないほどの満足を得ることができた。氏神様が願ったとおりになってくれただけだったのだ。

しかし九州遠征から帰ってくると、欲が出てきて乙女に行きたくなる。桃と同じで 8 月の熟れた夏もいいが、みずみずしい 7 月中旬の夏を味わいたい。

16 万キロ走ったポンコツの愛車の修理に 10 万の出費は痛かった。でも一回の夏には変えられない。結局、2 週間で 6 回も乙女に行ってしまった。蕾だったヨツバヒヨドリが開花していく 2 週間を観たということだ。

空は青かった。高原内にひらひら舞い降りるアカシジミ。トイレの脇でゆったりしているスミナガシ。琴川ダムにはミドリシジミもいた。3 種とも、乙女では初めて観察した。朝霧の中でアカセセリの交尾も観たし、中腹のシダでは蛹殻にぶら下がる、羽化したばかりのキベリタテハも観た。エルタテハにいたっては、羽化していくその時間を撮影できた。

日に日にウラジャノメは減っていき、クジャクチョウは増えていく。アイノミドリシジミの乱舞はただ見惚れてしまい、老人さながら突っ立っているだけで幸せになった。来年こそ、老人を連れて来て、見えない目にきらきら光る緑の輝きを見せてあげようと思った。

ほら、ギンボシヒョウモンがミドリヒョウモンを追いかけしていますよ。アザミにはアカセセリが来ました。アイノはあっちでもこっちでもくるくる回ってますよ。

目が見えなくとも老人は笑顔になって翅音を聞き、花粉のついた前脚や輝く鱗粉のひとつひとつを観るだろう。その風景が、若いときに観た記憶からの想像で構築したものとしても、声をかけたその瞬間だけは実際に見えていた、そんなお伽話のようなことがないなどと、誰が言えるだろう。

私はまだ目が健全だし、まだまだ観なければならない。

夏は熟れていく。



◆町の駅やまなし常設展示

JR 中央線・山梨市駅北口にある「街の駅やまなし」のスペースをお借りして、乙女高原展を開催しています。掲示板1枚と長机1脚だけのミニミニ展ですが、毎回テーマを決めて1～2か月程度で展示替えしてきました。ただいまシーズン58「乙女高原の秋の花」ちょうど今頃から秋の終わりに見られる花々を紹介しています。近くにいらっしゃった折には、ぜひお立ち寄りください。併設されているカフェもおいしいですよ。



◆今後の活動予定

●草刈りボランティア

日 時：11月23日(日) 勤労感謝の日 9:00～12:00
集 合：乙女高原グリーンロッジ
持ち物：水分、帽子、昼食、おわん、箸(豚汁用)

●草刈りボランティア準備 ※1

日 時：11月14日(土) 9:00～12:00
集 合：乙女高原グリーンロッジ
持ち物：水分、(弁当)、帽子、



●訪花昆虫調査※2

日 時：10月17日(土) 10:00～15:00(予定) 予備日 21日(水)
集 合：乙女高原グリーンロッジ
持ち物：弁当・水筒・雨具(防寒着)

活動参加申し込み
QRコードはこちら



NEW! ●フクロウの巣箱かけ

日 時：10月18日(日) 10:00～15:00
集 合：乙女高原グリーンロッジ
持ち物：弁当・水筒・雨具(防寒着)

フクロウはおもにネズミを捕って食べている猛禽類です。乙女高原の森にはアカネズミやヒメネズミが、草原にはハタネズミがおもに暮らしています。乙女高原のフクロウは、どちらのネズミを多く食べているでしょうか。



●自然観察交流会

日 時：10月17日(土) は訪花昆虫調査※2 と兼ねる

11月14日(土) 草刈りボランティア準備※1 と兼ねる
(集合は 9:00 乙女高原)

12月5日(土)

2026年

1月9日(土) 2月6日(土) 3月6日(土)

集 合：道の駅牧丘はなかげ 9:00
持ち物：弁当・水筒・雨具(防寒具)



自然観察交流会で見られそうな蛾、実、氷草

●甘利山で草刈り体験

乙女高原の姉妹草原ともいえる甘利山(韮崎市)の草刈りです。
10月17日(土)、18日(日)、25日(日)、11月1日(日) いずれも 9:00～12:00 集合：つつじ苑
主催：NPO法人 甘利山倶楽部 0551-22-6682

●今号は編集を井上敬子、校正を植原彰さん・廣瀬晴美さんが行いました。その後、芳賀月子さん・三枝かめよさんの印刷、山本和美さんの発送作業を経て、みなさまのもとに届けられる予定です。

乙女高原ファンクラブの刊行物

←乙女高原案内人養成講座のテキスト

『伝えることで守る 乙女高原の自然』

(A4判 270頁 2024年)モノクロ。2006年テキストの増補改訂版。頒価 1,500円。送料は1〜2冊430円。送金は郵便振込・ゆうちょ銀行で。

乙女高原を歩く際のお供に『乙女高原の自然観察』→

(A5判 30頁 2023年)オールカラー。1ページに1テーマ。頒価 300円。送料は1冊:180円、2〜8冊:270円。送金は郵便振込・ゆうちょ銀行で。

乙女高原とファンクラブ11年間の集大成『乙女高原大百科』→

(A5判 602頁 2013年)乙女高原メールマガジン11年間の中身を編集した厚さ3cmの本。一部カラー。頒価 2,000円。送料は1・2冊なら430円。送金は郵便振込・ゆうちょ銀行で。

乙女高原フィールドガイド シリーズ

…欲しい方は事務局までご連絡ください



フィールドガイドⅢ スミレの観察のおともに

『乙女高原のスマイル・ウォッチング』

→在庫切れ

フィールドガイドⅡ

マルハナバチ観察と調査のおともに

『マルハナバチ ウォッチング 改訂新版』

フィールドガイドⅠ

春から夏にかけて咲く草花のガイド

『乙女高原のお花たち 第三版』

いずれもA3判。両面カラー。折りたたみ済み。ポケットに入れられるサイズになっています。

■乙女高原ファンクラブの普通会員になりませんか？

『数は力』という言葉があります。ファンクラブの会員が多くなれば、それだけ乙女高原の保全に対するファンクラブの発言力が増します。まわりの方をファンクラブに『巻き込む』ことも乙女高原を守る活動の一つです。まわりの方にファンクラブをお勧めください。

乙女高原ファンクラブに入会するには…

「入会します 氏名・郵便番号・住所・電話番号」というファックス、メール、手紙等を事務局までお届けいただければ、いつでも、だれでも会員になれます。

- ・入会金も年会費もありません。乙女高原を守る力が1人分、大きくなります。
- ・普通会員には年4回、サポーター会員には年1回、ニュースレターが届きます。

今号は普通会員のみに
お送りしています。

■乙女高原ファンクラブへの連絡先■

【事務局】植原 彰(方) 〒404-0013 山梨県山梨市牧丘町窪平 1110-3

TEL 090-7246-8625 FAX 0553-35-3682 電子メール otomefc@fruits.jp

※会報への原稿や写真等の投稿もこちらにお送りください。

WEB <https://fruits.jp/~otomefc/>

●郵便振込●番号：00220-8-71093 加入者名：乙女高原ファンクラブ

●ゆうちょ銀行●店名：029店「当座預金」番号：0071093 加入者名：乙女高原ファンクラブ



ホームページ



フィールドノート
旧観察ブログ



アーカイブ
旧活動ブログ



乙女高原後援会
フェイスブックグループ



Instagram